

山 置 大		山 置 大		山 置 大	
角館こども園	角館總鎮守 神明社	勝楽山成就院 薬師堂	立町	源頼朝 仁田忠常 大猪 工藤祐経 曾我五郎 曾我十郎	「富士の巻き狩り」 ふたつの伝説
武田 信玄	大坂冬の陣 今福の戦い	町割四〇〇年 角館町縄張り	芦名義勝 角聖院妙阿 妙阿の配下	角館きがた	
武田信玄	佐竹義宣 芦名盛泰 戸村義国 矢野正倫 飯田家貞	広目屋	広目屋		
萬谷会	広目屋				
信玄なのであった。	武田勝千代は、幼い頃からよく本を読み、学問に励んでいた。勝千代が十二歳のある夜、厠へ行くために縁側へ出ると、そこにあった木馬が突然言葉を発した。「勝千代は臆することなく『軍術も剣術も大事である。これぞ剣術の極みである』と言うやいなや、木馬を一刀で斬り倒す。木馬の正体は、大きな狸であった。幼少時代から学問にも武芸にもよく励んでいたこの勝千代こそ、のちに戦国最強の騎馬軍団を率いた武田信玄なのであった。	関ヶ原の戦いの後、秋田の領主となった佐竹義宣は慶長十九年（一六一四）九月、参勤のため江戸に向け出立するが途中、幕府から大坂への出陣命令を受ける。義宣は急ぎ国許へ遣いを出し軍勢の仕立を命じた。十一月十七日、義宣は若武者に成長した甥の芦名盛泰を伴い、一千五百の軍勢で大坂に着陣した。佐竹軍の陣は大坂城の北東を流れる大和川岸の今福村で湿地帯が広がる先に豊臣方が四重に柵を作り、大野治長隊の武将・矢野正倫、飯田家貞が守備していた。十一月二十六日早朝、佐竹軍の渋江政光、戸村義国らが攻めかかり戦が始まった。豊臣方の油断もあって佐竹軍は次々と柵を乗り越え進軍。豊臣方の矢野・飯田も最後の柵で奮戦するが討ち取られ、佐竹軍が四柵を占拠した。しかし、豊臣軍は木村重成らが援軍として駆けつけた佐竹軍を押し戻す。最前戦で防戦していた渋江が討たれ、戸村も傷を負うなど苦戦する中、上杉軍の加勢があり豊臣軍は撤退した。この戦いで戸村義国ら佐竹家臣五人が徳川秀忠より感状を受けた。幕府方二十万の兵の中、感状を受けた者が十二名ということからも今福の戦いがいかに激戦で戦況に大きな影響を与えたかがわかる。幕府における佐竹軍の評価は大いに高まったのである。	関ヶ原の戦い（一六〇〇）の後、徳川家康による全国の大名の転封・移封が相次ぎ、この地をおさめていた戸沢氏は常陸松岡（茨城県）に国替えとなった。代わって水戸から佐竹氏が秋田の領主となり、佐竹義宣は会津の芦名氏に養子になった弟の芦名義重を角館城主にした。義重は角館に移って名を芦名義勝と改め戸沢氏が居住していた古城山から北側一帯の城下で十七年生活をしたが川の氾濫や大火など苦労が続いた。元和六年（一六二〇）に「国一城令」が発令され角館城も取り払われることになったのを機に義勝はこれまでの城下を古城山の南側の勝楽村に新しい町づくりを決意した。新しい角館町の縄張り（設計）を行なったのは生田村の修験者・角聖院妙阿とされている。元和六年から着手した城下移転の完成したのは何年かわからないが、同年末には早くも旧居から移転した記録はあるので、すこぶる急いだ事業であった。新しい町割りで安定した芦名家だったが承応二年（一六五三）義勝が角館に入って五〇年目に芦名家は断絶してしまう。そのあと佐竹北家が「所預」として角館地方の支配の任につき、角館城代として明治の廃藩、そして現在にいたるまで町民と共に四〇〇年続く町並みが守られて来たのである。	一一九三年、源頼朝は鎌倉幕府征夷大將軍として富士の裾野で大規模な巻き狩りを行なった。猪や鹿などの獣を捕獲することで幕府の權威を神に問い、また鎌倉武士にとって重要な軍事訓練という位置づけをし、多くの御家人も参加していた。そしてこの巻き狩りには、二つの伝説が残っている。一つは、北条義時家臣仁田四郎忠常の猪退治である。大猪が現れ、頼朝の本陣めがけて突進していった。仁田忠常はすかさず馬を出し大猪に挑むが、馬と一緒に跳ね飛ばされてしまう。しかし、ぱっと大猪の背中に飛び移り見事に仕留めるのであった。頼朝は、巻き狩り一番の大手柄と喜び、そのあたりの土地を仁田忠常に褒美として与え、富士の巻き狩りの伝説となっている。そして、その夜二つ目の伝説が起こる。曾我十郎祐成と曾我五郎時致兄弟の「曾我の仇討ち」である。曾我兄弟は幼い頃、伊豆国伊藤荘の領土争いにて、工藤左衛門尉祐経により父を殺害されていた。二人は、このことを幼い頃から憎み、仇討ちを達成するために生きていたのだ。工藤祐経は、京で平重盛に仕えた経験を活かし文人として頼朝からの信頼を得、幕府の御家人となり狩りに参加していたのである。曾我兄弟は雷と雨が降りしきる夜をつき、仇討ちを決行したのであった。のちにこの「曾我物語」は、悲願を達成した祝いとして、江戸時代には流行り歌舞伎の縁起物の演目として用いられた。また現代でも新春歌舞伎などで「寿曾我的対面」が演じられ、歌舞伎十八番「矢の根」では曾我五郎が登場し、富士山や宝船、打ち出の小槌などの道具も登場し、ハレの日に演じられるめでたい演目となっている。	

角館の柵祭り

観光客のための「やまぶっつけ」 令和4年9月7, 8, 9日

9月8日		場 所		曳 山 名	
No.	時 間				
1	18:00	角 館 樺 細 工 伝 承 館		北 部 一 岩 瀬	
2	19:00	角館樺細工センター「たてつ」付近		本町通り 一 菅 沢	
3	19:00	横 町 十 字 路		横 町 一 西 部	
4	19:00	旧 市役所角館庁舎跡地前		大 塚 一 東 部	
5	19:30	ファミリーマート角館川原町店付近		駅 前 一 川 原 町	
6	19:30	土 間 人 付 近		西勝楽町 一 中央通り	
7	21:00	秋 田 銀 行 前		七 日 町 一 桜 美 町	

◆祭礼		◆神明社	
七日	午前十時	例大祭当日祭	
八日	午後八時	例大祭宵祭	
八日	午前八時から	神輿渡御	
成就院薬師堂			
八日	午後三時	祭典開白法要	
九日	午前七時十分から	御輿巡行	

◆曳山のみどころ	
七日	午後四時ゝ 神明社参拝、十八台の曳山が一斉に神明社へ
八日	午前十時ゝ 佐竹さんへ、各曳山が武家屋敷通りを佐竹さんへお見せにまいります。 午後六時三〇分ゝ丁内八ヶ所で観光やまぶっつけ（別表） 薬師さん参拝のほか各曳山とも丁内を見せながら自由に動きます。
九日	午前十時ゝ 薬師さん参拝の曳山、あるいは町内を見せる曳山など。夜八時頃、夕食後、各曳山は偵察員を出し作戦を練りながら曳山ぶっつけの相手はどこか、一番スリルに富んだ時間となります。十日未明まで続きます。
◆お祭りの解説	
山車（曳山、やま） 祭の「余興」として出されたものですが今では祭の主役のようになっていきます。古くは薬師さんの祭にいたものといわれています。 上りやま 目的の地（神明社、佐竹さん、薬師堂）へ向かうときの曳山をいいます。囃子は重々しく、ゆったりとしたセーヤードンという囃子です。 下りやま（道中） 目的の地で参拝、見せたあとの帰りの曳山をいいます。囃子は、ベレレ、ベレレと軽いテンポで、道中ともいいます。 交渉（こうしょう） 曳山が丁内に入るとき、曳山と曳山が出合ったときに交渉といって黄色いタスキをかけた曳山の交渉員が挨拶と話し合いをします。曳山では重要な役目で交渉状況により道をゆずることになります。 張番（はりばん） 各丁内に設置され、神明社と薬師の御輿を迎えて丁内の安全、加護をお祈りするとともに、曳山の出入りの許可丁内でのトラブルの交渉にもあたります。各丁内とも年番組織で運営をしています。昔は自町内の曳山の動きもここから指揮しました。	

ユネスコ無形文化遺産・国指定重要無形民俗文化財「角館祭りのやま行事」

【新型コロナウイルス感染予防に関するお願い】

角館町内では、マスクの着用や消毒、ソーシャルディスタンスをたもち、感染拡大のリスクとなる状況を避けてお楽しみ下さい。

●皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



マスク着用



手指消毒スポットでの消毒実施



大声で歓声の自粛（拍手で応援を）



身体的距離の確保

曳山人形外題解説

曳山名	人形場面	人形作者	囃子・踊り	人形場面解説	責任者
1 川原町	巖流島 佐々木小次郎	広目屋	角館お山ばやし 扇栄会	今からちょうど四一〇年前の一六二二年四月一三日山口県下関市・彦島の東方にある船島(のちに巖流島に改名)での天下一の剣豪の座をかけた一騎打ちの場。二刀流を生み出し六〇数度の決闘をして一度も負けたことがない剣豪宮本武蔵。相対するは秘剣ツバメ返しの違い、手、巖流佐々木小次郎。この戦いには諸説あるが決闘の場で二時間も待たされた小次郎が鞘を捨てたことを己の敗北の予兆と指摘されるなどして頭に血が上り、冷静さを失ったところを武蔵に梶で額を割られたとされている。	竹内賢承 高野豊彦 渡邊克徳 辻瞬也
2 北 部	長篠の合戦 織田信長 武田勝頼	北部丁内 若 者	上桧木内 昇風会	天正三年五月二日、三河国長篠城をめぐり、三万八千人の織田信長・徳川家康連合軍と、一万五千人の武田勝頼の軍勢が戦った合戦である。兵力は織田・徳川連合軍がはるかに上回っていた。織田・徳川軍は武田軍の強力な騎馬隊に対して、三千丁ともいわれる鉄砲を駆使し、激闘の末、勝利を収めるのであった。	佐川陽介 武藤和也 金永大
3 山 根 旭 谷 地 町 会	黒塚 阿闍梨祐慶 安達ヶ原の鬼女	広目屋	徳月会	紀伊国東光坊の阿闍梨祐慶は、山伏らと修行の旅を続けていた。陸奥国に入った一行は、安達原で夕暮れを迎え一軒の家を訪ねると老女が居た。一夜の宿を頼み、みすばらしいからと断られたが何とか泊めてもらう。夜、女は焚火の薪を取りに山へ行くが、「決して自分の寝室を覗かないように」と言い残す。しかし言いつけを破り女の部屋を覗くと、死骸の山があった。女は、安達原の黒塚に住む鬼女と気づき慌てて逃げ出すと、鬼の本性を現した女が追いかけてきた。祐慶たちが必死で調伏の祈りを唱えようと、その法力に負けた鬼女は弱り果て姿を消した。	草薨拓也 中村隆一 藤原翼 八柳健太
4 横 町	六条本圀寺合戦 細川藤孝 小笠原信定	横町若者	角館山本組	永禄一一年(一五六八年)の年の瀬、織田信長は京都の安定を見計らい、六条本圀寺に足利義昭を残し本拠である美濃国岐阜城に一旦帰国していた。翌年一月五日、小笠原信定は三好三人衆らと共に、信長が不在であり義昭周辺の気の緩んでいるところを突いて本圀寺を襲撃したのである。しかし義昭を弑することは叶わず。将軍の急を聞きつけ本圀寺に駆けつけた細川藤孝、明智光秀らと三人衆側軍は戦闘となる。	黒澤賢太郎 高村弘道 千葉太生 岡田光
5 上 新 町	押 戻 大館左馬五郎 清姫の霊	萬谷流 上新町 若 者	おやまばやし 清友会	押戻とは、独特のいでたちの勇者が怨霊や妖怪の前に立ちふさがり、その行く手を阻むという役の総称、演技、演出のこと。“荒事”と呼ばれる、江戸の歌舞伎の特徴である荒々しい表現方法の一つ。隈取をして、荒事の鬘と衣裳を身に着け、高下駄を履き、竹の笠と太い青竹を持った勇者が、力強く勇ましく登場し、荒れ狂う怨霊や妖怪を花道から舞台奥に押し戻し、退散させる。	小林道春 藤枝寛 叶孔河 細川栄太
6 中 央 通 り	桜井の別れ 楠木正成 楠木正行	広目屋	奏雅扇舞会	楠木正成は都に攻め上がってくる足利氏の大軍を防ぐため死を覚悟して戦場に向かう。桜井の駅にさしかかった頃嫡子正行を呼び「お前を故郷へ帰す」と告げた。「父上と共に」と懇願する正行に対し、「自分が討死した後を考え、帝のため身命を惜しみ、忠義の心を失わず一人でも生き残り、必ず朝敵を滅せ」と論し、形見として帝より下賜された菊水の紋が入った短刀を授け今生の別れを告げた。	高橋寿史 藤田賢史 山谷吉輝
7 七 日 町	歌舞伎十八番 暫 鎌倉権五郎景政	小 松	わらび座	舞台は鶴岡八幡宮。皇位へ即こうと目論む清原武衡が関白の宣下を受けるところ。そこへ加茂次郎義綱が許婚の桂の前たちを連れ立って奉納へ訪れる。加茂家をかねてから快く思っていない武衡は義綱に無理難題を浴びせる。うんと言わぬ義綱に腹を立て、腹出したちに命じて義綱ら一同を斬り殺そうとする。まさに絶体絶命の瞬間、「暫く」と大きな声。二mを超える大太刀を差した鎌倉権五郎が現れ、さっそうと助ける。	荒木大輔 加藤寛之 千葉博幸 佐藤秀典 根布谷貴之
8 西 勝 楽 町	歌舞伎十八番の内 不破 不破伴左衛門 名古屋山三	文 峰	秋月会	江戸吉原の大門口。深編笠の二人が出会う。一人は不破伴左衛門、あとの一人は名古屋山三だ。この二人は関白家の重宝剣の紛失詮議の役目を与えられ、流浪している身だ。山三は吉原の傾城「葛城」と契りを交わした仲で廊に來ていた。これを見た、伴左衛門は刀の詮議も忘れて廊通いの山三に喧嘩をふっかけ、真剣を抜いて勝負しようとする。	井上健太 千葉拓也 羽根川裕 三浦耕輔
9 本 町 通 り	寿曾我対面 曾我五郎時致 工藤左衛門祐経	広目屋	神代芸能保存 嬉遊会	源頼朝の重臣工藤祐経は富士の巻狩りの総奉行を仰せつけられることとなり、工藤の屋敷では大名や遊女大磯の虎、化粧坂の少将が祝いに駆け付けている。そこへ朝比奈三郎が二人の若者を連れてくる。見れば、かつて工藤が討った河津三郎の忘れ形見、曾我十郎・五郎の兄弟であった。父の敵とはやる兄弟に工藤は「時節を待て」と言い、巻狩りの身分証明書である狩場の切手を兄弟に与え双方再会を期して別れる。	安藤雄介 大澤伸 戸澤和美 佐々木裕之
10 駅 通 り	一谷嫩軍記 菟原の里林住家の段 平薩摩守忠度 岡部六弥太忠澄	広目屋	愁明会	平家の平薩摩守忠度は勇猛な武将であるとともに、藤原俊成に師事して歌をたしなむ歌人でもある。忠度は「ささ波や、志賀の都はあれにしを、昔ながらの山桜かな」という自作の歌が、俊成が撰者となった。編纂している「千載和歌集」に加えられ、それによって歌の誉れを後世に残す生涯の望みとあった。源義経は彼の心を汲み、忠度の名は伏せて「千載和歌集」にいれる事を俊成に許した。その旨を忠度に伝えるべく、詠歌の短歌も山桜の流し枝に結び、岡部六弥太忠澄にそれを届けさせる。岡部六弥太忠澄は菟原の里に忠度を訪ねて枝を渡し、戦場での再開を約束する。	堺信彦 齊藤政範 半田龍介
11 駅 前	義経千本桜 川連法眼館の場 源 九郎狐 鬼佐渡坊	萬谷流 角館町	飾山囃子 手踊り会	義経千本桜の四の切である。 吉野山中の川連法眼の館に匿われている義経のところへ、家臣の佐藤忠信が訪ねてくる。母の看病で実家に戻っていたと言う忠信に、義経は伏見稲荷で別れた静御前の様子を聞くが、どうも要領を得ない様子。そこへ、静御前が忠信を供に到着したとの知らせが入る。怪しむ・義経は二人の忠信のどちらが本物か、静に命じて確かめさせることにする。静が初音の鼓を打つと、忠信が現れ、鼓に聞き惚れる。怪しい様子に、静が問い質すと忠信は鼓の皮に縫い込まれた夫婦狐の子で、親恋しさから人間に化けて静に付き添ってきたのだと白状する。それを知らず義経は、肉親の縁薄いわが身と比べて狐を哀れに思っており鼓を与えることにする。狐忠信は喜び、鎌倉方に味方した僧たちが攻めてくることを知らせ、山へと帰っていく。	高橋一也 藤原隆志 藤原務
12 菅 沢	時今也桔梗旗揚 愛宕山の場 武智光秀 安田作兵衛	萬谷流 桜雅会	飾山囃子 弘道流奏秋会	大蛇丸によつて滅ぼされた名門の家の子・児雷也と綱手姫は、仙素道人に助けられ育てられる。道人は、児雷也には蝦蟇の術、綱手にははなめくじの術を受け、浪切の剣を探し出し、必ず二人で助け合つて親の仇をとるようにと話す。その後、児雷也は金持ちから金を奪い、貧しい者に分け与える義賊として名をはせる一方、大蛇丸に近づく計画をたてる。浪切の剣を求めて地獄谷へやってきた児雷也と綱手姫は、火炎渦巻く中、大蛇丸と戦うのであった。	戸澤真 平田貞博 上藤祐太
13 桜 美 町	羅城門の鬼退治 渡辺源次綱 鬼茨木童子	文 怜	秋月会	主君小田春永の命により接待の準備をしていた武智光秀。張り巡らされた幕に光秀の桔梗の紋が描かれているのを見た春永は激怒し、様々な理不尽な仕打ちを光秀に行った。遂には光秀が貧しい浪人時代に客をもてなすため妻が売った切り髪を春永から渡されると意を決し、死をもつて抗議すると切腹の準備を進めた。辞世の句として、「時は今 天が下知る 皐月かな」と詠み上げるが切腹はせず、逆に春永の使者を切り捨て、家臣安田作兵衛と本能寺へと向かう。	戸部史之 菊地豊 金谷貫慈 佐藤重明 龜谷渉
14 西 部	勢獅子音羽花籠 お祭り 鳶頭松吉 鳶頭梅吉	廿町 如月会	神代芸能保存会 藤原組	時は、平安時代中期。大江山に住んでいる酒吞童子を源頼光と四天王が退治した。同じ頃、平安京の都「羅城門」にも鬼が出るとの噂あり四天王の一人、渡辺源次綱は、噂を確かめるため羅城門へ向かう。しかし、誰もおらず、証を残すため立札を打ち込む。するとそこへ若い女に化けた茨木童子が現れ、襲いかかってくる。綱は茨木童子の片腕を切り落とす。茨木童子は、「七日以内に腕を取り返しに来る」と明言し、雲の中へ消える。七日後、老婆に化けた茨木童子は現れ腕を取り返し、空へ去っていくのであった。	小松真徳 高橋光 草薨友彦 川村翔太 阿部龍哉
15 下 岩 瀬 町	小谷城虎口攻め 蜂須賀小六正勝 藤堂高虎	広目屋	祭喜会	今日祭礼の日。人々もいそいそと大層な賑わいぶり。そこへほろ酔い気分の鳶頭がやって来て、あたりからは「待ってました」の声。「待っていたとはありがたい」と鳶頭は粋な踊りを始める。そこへ若い衆が打ちかかり、それをあしらいい、なおもお祭りの賑わいを楽しむ。	島山忍 木元博幸 島山勉 草薨伸 木元亮太
16 岩 瀬	蜘蛛の絲宿直噺 源頼光 女郎蜘蛛の精	萬谷流 東部若者	角館おやま囃子 弘道流 奏吟會	織田信長と浅井長政の対立は、金ヶ崎合戦から始まった。きつかけは長政の離反といわれている。天正元年、小谷城の戦いは織田信長と浅井長政の間で行われた最後の戦いとなる。この戦いは浅井氏の滅亡のきつかけとなり、また、長政による援軍要請に呼応した朝倉氏を滅亡させる原因ともなった。信長により総攻撃を命じられた木下秀吉率いる軍勢が、夜半に長政の拠る本丸と京極丸を占拠する足掛かりとなる升形虎口突破時の一場面となる。	坂本純平 佐藤健 鈴木孝史 尾形祐平
17 東 部	船弁慶 武蔵坊弁慶 平知盛の霊	大塚若者	角館飾山囃子 保存会	平家追討に功績をあげた義経であったが頼朝に疑念を持たれ鎌倉から追われる身となる。西国に逃れようと摂津の大物浦に到着する。同行していた静御前は弁慶の進言もあり都に戻ることになる。そして、義経との再会を願いながら涙にくれて一行を見送る。義経一行が出航すると突然、海が荒れ壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現す。平知盛の怨霊は義経を海に沈めようと長刀を振りかざし襲いかかってくる。義経は自ら刀を抜き、弁慶は祈禱し怨霊を退散させる。	工藤秀行 高橋徹 鈴木勝 黒澤淳
18 大 塚	巖流島 宮本武蔵 佐々木小次郎	広目屋	角館お山ばやし 扇栄会		責任者